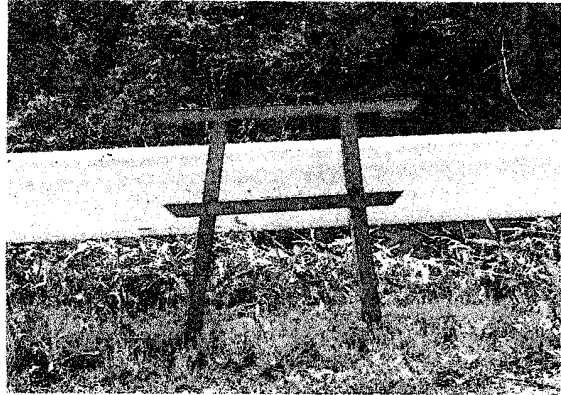


# 風

富田守男  
⑭  
「現場」からの



立小便お断りの看板に代わり神社の鳥居の看板が増えてきている。効果があるとしても宗教観で複雑な気持ちになる。

れを最優先に考え、儀礼的な場面等をなくした、家族中心で行う葬儀スタイルだ。一般の葬儀の小利版という捉え方が通じ、多くの場合、通夜や葬儀・告別式・火葬といった一連の儀式は通常通り行われるが、友人知人には全く声をかけないためか、葬式の規模は小さくなり、一般の葬儀と比べて低価格で行われ、小さなお葬式として近年、多くの葬儀で行われてきているスタイルだ。また火葬のみを行う小さな火葬式

## 葬儀という視点から、高齢化社会

### でのこれからを考えてみませんか

や、通夜をしない小さな白葬も多くなりました。家族のみで行う葬儀のあった通夜に、故人に会いたいとの希望を伝え、松本の葬祭センターに向かい、通夜に参列する。参列者は16名だが、今まで経験した通夜とは違い、故人の死を心から悲しむ者だけの通夜の雰囲気は、心打たれるものだった。孫たちの流した多くの涙は、故人にとどまらなかつた。司会や運営スタッフ、火葬場への搬台車、火葬料金、骨壺・棺桶、会葬札状などの費用が含まれたものだ。近年は、骨壺は陶器製ではなく、樹脂製の減額化を目的に布製も多くなっている。この情報はも聞かなくていい。新聞のおみやみ欄でも、葬儀は近親者のみで行った、この記載も多々見られるようになってきている。高齢者社会で、一人暮らしの世帯が多くなっているからだろうか。

通夜の折、僧侶から葬儀の持つ意味が薄れていくのを危惧する講話があった。葬儀や葬式は、人の死を弔うために行われる葬儀で、葬儀の様式には、それを行う人たちの死生観、宗教観が深く関わっている事。宗教の違いが、その葬式の様式の違いになっている事。だが、葬儀は故人の為だけでなく、残された者のために行われる意味合いも強くあり、残された人々が人の死を如何に心の中で受け止め、位置付け、そして処理するか、これを行うための援助となる儀式が葬儀。葬儀は故人との出会いの場所でもある。良い思い出を心に刻んでほしいとの内容だった。葬式スタイルの多様化は、お寺や寺院などの維持にも大きな難題になってきているのだ。確かに私自身、葬儀の慣習の知識は少ない。以前には通夜は誰かが喪主の妻をして、魔よけの意味があるの夜明けまで、練言の火を絶やさない。と教わったが、近年では消防署などから式場では夜間は火をたかない、この指導による、夜通しではなくなり、半通夜

と呼ばれる形態、夜は家族が帰ってしまふこの話も聞かなくていい。また葬儀終了後に「振の塩」と呼ばれる清めの塩も、神道由来の慣習で仏教の教義に反するとの意見もあり、元来これを行っていなかった浄土真宗を中心に、近年では行われないケースも多くなっている。これまでも、知る事ができた。これまでの葬儀に関する知識に疑問を持つ内容も多く、故人の為にどのような葬儀を行えばいいか、改めて宗教観を学ばなくてはならないとされた葬儀でもあった。

(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白黒村森上)